三

磐音が今津屋に戻ったとき、七つを回っていた。

「ただ今、戻りました」

老分の由蔵に声をかけると何人かの客と対応していた由蔵が、

「坂崎様、後ほど旦那様の供を願います」

と視線を向けた。

「畏まった」

磐音がいつもの階段下の細長い部屋に行くと、

「坂崎さん、帰ったそうじゃな」

と半年ででっぷりと太った感じの竹村武左衛門がいた。

「小僧どのに使いを貰って馳せ参じたところだ。それがしが控えておるからには、夕暮れの押し込みなど一人も許さぬ」

と胸を張った。そこへ台所から土瓶に湯を貰ってきた品川柳次郎が姿を見せて、

「竹村の旦那、たれに大言壮語しておる」

と茶化した。正直言って竹村武左衛門の武術は体付きほどのことはない。

「これは参った」

武左衛門が手を頭に当ててぽんぽんと叩くと、

「よう戻られた」

と磐音の江戸帰府を喜んだ。

「坂崎さん、話は柳次郎から聞いた。若いうちの苦労は買ってでもせよと古人も申す。ここは辛抱して時を待たれよ。それがしも微力ながら手伝い申す」

その節にはと頭を下げる磐音に、おこんが顔を出して、

「旦那様のお供で金座の相場立会い所に行くんでしょ。その前にお立ち寄りになるところがあるそうなの。早いけど今のうちに夕餉を食べておいて」

と呼びに来た。

七つ半の刻限、磐音は支配人の林蔵を従えた今津屋吉右衛門の供で、まず下谷御切手町の同業の両替屋に立ち寄り、吉右衛門が用事を済ませた。

「坂崎様、松下町に金座の金銀相場の立会い所があるのをご存知ですか」

吉右衛門が声をかけたのは、車坂から下谷広小路に向かう道中だ。

右手には東叡山寛永寺寺中の寺が門を連ねていた。

「先ほどおこんどのに言われて知ったくらいにございます」

「本両替町の金座の内にあった立会い所だけが、数年前に神田川の向こうに移りましてな」

と吉右衛門は、磐音との話のきっかけを摑むように話しかけ、

「それはそうと、難儀されたようですな」

と磐音の旅に触れた。由蔵から経緯は聞いたのか。

「それがしのことで今津屋どののお耳まで煩わせます」

「私もいろいろと見聞きしてきたが、かような話は知らぬ。それだけ、奈緒様が見目麗しい女性ということでございましょうな」

「一度転がりだした石は弾みがついております」

三人は俗に言う山下の鉤の手を曲がり、広小路の北側に入っていった。すると明かりと人込みの火除け地が広がった。

そのとき、磐音は珍しい人物を見かけた。

山陰道出雲の斐伊川河原で、仇討ちの男女を鮮やかな手並みで返り討ちにした田野倉源八の端整なかおが人込みを縫って現れ、細身を薄暮に溶け込ませるように車坂へと下がっていった。

「どうかなされましたかな」

「知り合いを見かけたとおもったものですから」

「声をかけられればよいものを」

「知り合いと申しても、山陰路の旅の途中にすれ違っただけの人物にございます」

「それは奇遇ですが、声をかけることもできませんな」

吉右衛門が笑い、なにか聞きかけたとき、支配人の林蔵が、

「旦那様、黒門町の川崎屋さんの店先が騒がしゅうございます」

と険しい声をかけた。

吉右衛門と磐音が支配人の差す方角を見ると、御用聞きや手先たちが店に飛び込んでいくところだった。

「坂崎様」

と声を書けた吉右衛門が走り出した。それに従って磐音も林蔵も走った。

「河崎屋さん、なんぞございましたか」

と吉右エ門が飛び込み、棒立ちになった。

磐音はそのかたわらを擦り抜けて、血の臭いがする店に入った。

帳場格子の中で番頭らしき男が血塗れで倒れていた。そして、御用聞きの親分と手先たち、店の奉公人たちが囲んで話していた。

「今津屋さん、やられました！」

と吉右衛門を認めた川崎屋半四郎が呆然として呻いた。

「老分さんはどうか」

半四郎が首を横に振った。

「抜き打ちの一太刀で絶命にございますよ、今津屋の旦那」

上野界隈を縄張りにする御用聞き、黒門町の新三が吉右衛門に伝えた。

「今のことかな」

「まだ老分の体は温けえや。押し込みの野郎、まだそう遠くには行っちゃいめえ。

新三親分は、手先の一人を残す探索のために広小路に飛び出していった。

磐音は、帳場格子越しに中腰のまま腰を割られた老分の斬り口を黙念と眺めていた。

磐音らが松下町の金銀相場の立会い所から今津屋に戻ったとき、五つの刻限で、すでに由蔵たちは川崎屋の奇禍を知っていた。

その由蔵が主に代わって、川崎屋へ見舞いに向かった。供にには品川柳次郎が付き、その夜、竹村武左衛門と今津屋に泊まり込むことになった。

磐音は、朝の鰻割きの仕事のことを考え、両国橋を渡って深川六間堀の長屋に戻った。

翌朝、宮戸川に鰻割きの仕事に向かった。

朝の間に松吉、次平と三人で行うのは、その日、宮戸川が扱う何百匹もの鰻割きだ。およそ一刻から一刻半の作業で百文の稼ぎになり、朝餉までついた。

この鰻割きが磐音の深川暮らしを支えていた。

久しぶりの仕事のわりには手先がこつを覚えていて、さほどの遅れもなく仕事をこなした。

「さすが坂崎さんだ、腕は鈍っちゃいないね」

と鉄五郎が感心した。

「親方、国許で楽をしてきたんだ。ちったあ、精を出してくれなくちゃなあ」

事情を知らない松吉が言う。鉄五郎は黙って頷き、

「後片付けをしな」

とだけ松吉に命じた。

磐音は朝から鉄五郎が焼いてくれた宮戸川の蒲焼を馳走になり、長屋に戻った。すると鰻捕りの幸吉が井戸端に待っていて、

「深川に戻ったというのによ、おいらに知らせねえなんて、浪人さん、冷たいぜ」

と手にしていた手拭いを振り回した。

「今朝、宮戸川で会えると思っていたが、来なかったではないか」

「昨日は大漁さ。それで宮戸川にはゆんべのうちに届けておいたんだ。今朝は、橋を渡って浅草に売りに行ってきた」

さようであったか、と答えた磐音は、

「久しぶりに、裸で語り合おうかのう」

と幸吉を湯に誘った。鰻割きを終えると体じゅうから鰻の臭いが漂う。それを落とすために馴染みの六間堀に二人で行こうというのだ。

「だから、待っていたのさ」

十二歳の幸吉は宮戸川の鰻割きの仕事のきっかけを作ってくれた恩人だ。それになにやかやと深川暮らしについても教えてもらってきた。

「では、参ろう」

磐音と幸吉は六間湯の暖簾を潜った。洗い場で互いの体を流し合い、洗い合った二人は、ざくろ口を抜けた。

男たちは仕事に出ている刻限で、湯船の隅に二人の隠居が首まで湯に浸かっているだけだ。一人は長屋の大家の金兵衛だった。

「これはこれは、大家どの」

「早速、鰻割きの仕事かね」

「ただ一つの定まった仕事にござれば、おろそかにはできません」

「いい心がけだ」

三人は磐音が留守をしていた間の深川六間堀の出来事などを話しながら、朝湯を楽しんだ。

こうして湯船で手足を伸ばしていると、磐音はつくづく深川暮らしの気楽さを感じ、江戸に戻ったのだという気分にさせられた。

「幸吉どの、近々いっしょにまた天ぷらでも食べに参ろう。ともあれ、溜まった用事を片付けるでな」

脱衣場に上がった磐音は手拭いを幸吉に預けた。

「今津屋のしごとかね」

金兵衛が訊く。

「いえ、その前に立ち寄るところがございましてな」

「おまえさんも江戸に帰る早々忙しそうで何よりだ」

「もそっと稼ぎになるとよろしいのですが」

「おや、旅でそんな口を覚えなさったか。おまえさんは一文二文の稼ぎは似合わないよ。そのうち千両万両を摑まれるお方だ」

金兵衛が笑った。

（そうなれば奈緒を見受けできるのだが……）

と磐音はちらりと思った。

金兵衛と幸吉とは六間湯の前で別れた。

大川端を永代橋まで下った磐音は橋を渡り、江戸の町中を東から西へ突っ切るようにして、昨日に続いて数寄屋橋の南町奉行所に年番方与力の笹塚孫一を訪ねた。

「二日続けて顔出しとは、なんぞよき知らせか」

御用部屋に配下の同心たちを集めて何事か指示していた大頭の切れ者が言った。

「笹塚様、一匹狼が押し込んだ店の調べ書きをすべて見せてはいただけませぬか」

「ほう、なにかしりたい。手口か、奪った金子か。それとも風体か」

「いきなり抜き打つという技の手口にございます」

笹塚孫一が磐音の顔を凝視すると、フイにそこにいた若い物書同心に、

「田辺、文庫に行って調べ書きを持って参れ」

と命じた。

笹塚は、磐音になにも聞かずに、好きなように町奉行所の調べ書きを読ませた。むろん笹塚の御用部屋でだ。すでに同心たちは自分の御用部屋に下がって、年番方与力と磐音の二人だけだ。

「なにか気にかかることでもあるのか」

調べ書きから視線を上げた磐音に笹塚が訊く。

「昨夜、偶然にも下谷広小路の両替商川崎屋の押し込みの直後を見ましてございます」

磐音は今津屋吉右衛門の供で下谷御切手町に行った帰りに事件と遭遇したと説明した。頷いた笹塚が、

「手口が気になるとは、下手人に覚えがあるということか」

「今のところなんとも申せませぬが」

「話してみよ」

磐音は、山陰路出雲の斐伊川河原で目撃した仇討ちの話をした。

「伊予今治藩を逐電した御小姓組の田野倉源八なる人物が、一匹狼の押し込みではないかと申すか。出雲と江戸とは大分離れておるがのう」

「その後も旅の道中で三度ほど出会いました。さらに昨夕、下谷広小路から車坂へと姿を没したのを見かけました」

「食い詰めて江戸に下ったか」

「決め付けるにはまだ早うございます。ですが、年の頃合、背丈などの体付き、端整な風貌などが似ているように思われます。それに抜き差しの後の突きの凄みは、田野倉の剣捌きに類似しているかと」

「なによりそなたが下谷広小路で見かけたという一事がなあ」

と言った笹塚が、

「調べ書きで呼んだであろうが、一匹狼の押し込みが強奪した金子は、川崎屋の一件を加えて一月半余のうちに四件六百両を超える。田舎侍め、どこで費消しおったか」

と呟いた笹塚は、

「やっぱりそなたはおれの福の神だ」

と言うと、声もなく笑った。そして、先ほどの同心田辺常太郎を呼ぶと舟の用意を命じた。

「そなたも付き合え」

笹塚は言うと刀架けから大小を取って腰に差し、ついでに十手まで帯に手挟むと、まるで何本も串を打たれた田楽のような格好になった。

笹塚と磐音、それに物書同心の田辺は、数寄屋橋から二丁櫓の御用船に乗った。

磐音は行き先を訊かなかった。さあ塚も喋ろうとはしない。お互い着けば分かると思っていたからだ。

御用船は、お堀から日本橋へと移り、さらに大川に出ると上流へと漕ぎ上がる。となれば、行き先は知れていた。

「吉原ですか」

「そなたは二日続けての吉原通いか」

「聞こえはよろしゅうございますが、御用では」

「つまらぬか」

笹塚孫一の大頭にちょこんと乗った小さな髷に川風が吹き付けると、乱れた髪が靡いた。

日の光で眺めれば、笹塚の羽織や袴は食い滓の染みだらけだ。知らぬ人には、風采の上がらぬ小役人と見えようが、どうしてどうして南町奉行牧野大隅守成賢の懐刀であり、頭脳なのだ。

磐音は川面から深川を遠望した。

水上から見る深川は旗本屋敷や寺が甍を連ね、その間に町屋がひっそりとあった。

二丁の櫓を揃えた船は、荷足舟を追い抜いて矢のように進んだ。竹屋ノ渡しが行くところ、山谷堀が口を開けて今戸橋が見えた。

待乳山聖天社下の山谷堀には船宿が雲集して、遊客はここで船を降りて土手八丁を歩くことになる。だが、御用船は、山谷堀を衣紋坂上の土手まで入り込み、止まった。

小者の船頭らをそこに待たせた笹塚は、磐音と田辺を引き連れて衣紋坂を下った。

刻限は磐音が昨日訪ねたと同じ昼前だ。

どこか気だるい感じが漂う大門を潜った笹塚は、田辺を左手の面番所に挨拶に出向かせ、当人は磐音を連れて、四郎兵衛会所を訪ねた。

手代から年番与力の訪問を知らされた四郎兵衛が会所の上がりかまちに出てきて、

「笹塚様自らお出ましとはどのような風の吹き回しにございますな」

と言いかけ、磐音の顔を認めて、おやという表情をした。

「四郎兵衛、この者が町方の密偵と気を回すでないぞ。おれの福の神でな、しばしば力を借りておる。いわば、朋輩だ」

「坂崎様が密偵などとは、この四郎兵衛も考えておりませぬよ」

二人は昨日磐音が通された奥座敷に招じあげられた。

「四郎兵衛、知恵を借りに参った」

といきなり本題に入り、田野倉源八の年格好、風体を説明して、

「……昨夕、下谷広小路から車坂へ向かった姿がこの坂崎に見られておる。どこぞに切ろうに上がったと思えるが早急に調べてくれぬか」

と命じた。

「承知仕りました。しばらくお時間を……」

四郎兵衛は中座すると手代衆を廓内に走らせた。

座敷に戻ってきた四郎兵衛は、

「笹塚様は、奈緒様のことをご存知ですか」

と磐音に訊いた。磐音が頷くと、

「ならば、昨日からの調べをお知らせいたしましょうかな。私が調べ上げた限り、奈緒様は未だ吉原に入っていないとみました」

「奈緒どのが売られた先は、吉原ではないと申されますか」

「四宿ということはありますまい。品川に千両もの金を出す女郎屋はございません。となるとお大尽が手桶の花にするのが一番の早道だ」

と四郎兵衛は言い切った。

奈緒は大店の寮か、旗本の抱え屋敷に囲われるのか。となると探す手立ては極めて難しくなる。

「四郎兵衛、京から尾張名古屋あたりというのは考えられぬか」

「なくもございますまい」

と笹塚の問いに首肯しながら答えた四郎兵衛が、

「京の吉原と密なるつながりを持つ妓楼がこの吉原に数軒ございます。私の勘は、奈緒様がいずれ吉原に入れられると教えております」

「京を発って二月余りが過ぎておる。当然、江戸に着いておらねばならぬがな」

「おそらく江戸には到着なされておりましょう。どこぞの寮に入って、吉原の仕来りやら遊芸百般を教え込まれているのではありますまいか。新玉の年に、妓楼は賑々しく奈緒様のお披露目を企てておるかもしれませぬぞ」

と言った四郎兵衛の視線が廊下に向けられた。

廊下には会所の手代の一人が控えた。

「四郎兵衛様、その者、確かに京町二丁目の香実楼を出ております」

「もはや大門の外に出たということか」

「はい、七つ半には香実楼をでております」

「初会ではあるまいな」

「五日にあげず香実楼の秋葉のもとに通っているそうにございます」

「秋葉太夫に会う」

と笹塚厳命し、四郎兵衛が、

「竹造、案内なされ」

とその手代に命じた。

京町二丁目の香実楼は半籬の楼で、抱えの秋葉は、顔の肌が透き通った、憂い顔の遊女だった。年は二十二というが陰花を思わせた。それだけに不思議な魅力を湛えていた。

秋葉に会ったのは笹塚と磐音だけだ。秋葉は、町奉行所の年番与力と磐音に自ら茶を淹れてくれた。

「今朝方、後朝の別れをした若侍について聞きたい」

笹塚の言葉に秋葉が頷き、

「田野倉源八様のことでございますか」

と里言葉でなく答えた。

「ほう、本名を名乗っておったか。田野倉がそなたのもとに最初に参ったのはいつのことか」

「神無月の紋日の前日にございます」

十月の紋日は二十日の恵比須講だ。とすると十九日ということになる。

「それからなんど通って参ったな」

「昨日が十日目にございました」

「ひと月半に十回とは、素浪人がよう金の続くことよ」

「お役人様、この里ではどんな金で黄金色なら通用いたします」

「なるほどのう。そやつが人を斬り殺して血に塗れた手で銭箱から強奪してきた金でもか」

笹塚の口調が険しくなり、秋葉が息を呑んだ。

「秋太夫、そなたが己の身で稼いだ金の詮議はせぬ。だがな、田野倉源八がそなたものとに登楼するのは次が最後じゃ」

笹塚孫一は懐から紙片を出して秋葉に広げて見せた。

十月十九日　京橋伊勢屋新兵衛　百三十七両　番頭殺害

十月三十日　浅草讃岐屋五右衛門　七十五両　手代及び剣術家殺害

十一月十四日　本所越前屋佐之助　百八十両　老分重傷および手代殺害

十二月四日　下谷広小路川崎屋半四郎　二百二十両　老分殺害

「この四日の夕刻過ぎにそなたのもとに揚がったことはないか」

笹塚の詰問に秋葉は文机から日誌のような覚え書きを出し、記憶を確かめていたが、瞑目して頷いた。

「この次、いつ参るな」

笹塚の目が、瞼を閉じたままの秋葉の顔を正視した。

秋葉は両眼を閉じたまま答えた。

「三日後に戻ってこられると約束なされました」

「よし、今日からこの者を会所に詰めさせる」

と笹塚は磐音に顎で差して。

秋葉が瞼を開けて、哀しげな顔で磐音を見た。